

強行遠足 ご支援のお願い

甲府中学・甲府一高同窓生の皆様へ

私たちは、平成以降の甲府一高卒業生(20~30歳代)を中心とした、強行遠足を支援する有志の集いです。「質実剛健」の校風に憧れて一高へ入学し、文武両道で高校生活を謳歌し、伝統行事の「強行遠足」で貴重な経験を積んだ思い出は、同窓生の皆さんならば賛しく共有されていることでしょう。

平成14年に起きた痛ましい交通事故で、一人の女子生徒が亡くなりました。強行遠足に参加し、青春の1ページを刻もうとしていた彼女の心を思うと、大変悲しく、残念なりません。この事故を受け、現在強行遠足は終着点を小諸(約100キロ)から、野辺山(50キロ)へと短縮する形で実施されています。

強行遠足の安全な実施に協力するため、先日開催された第81回強行遠足に平成6年卒業生3名がボランティアとして参加し、巡回係を担当しました。平成14年の事故以降、強行遠足の安全な運営に関する同窓会の支援も一層充実し、検印所にはAEDや医療スタッフが配置され、教職員・保護者も協力して事故の教訓を生かし、巡回活動などを安全第一で行っています。

しかし、私たちがボランティアとして強行遠足に参加する中で、昼夜を徹して歩く小諸コースを知る人が少くなり、伝統の風化が進んでいることを痛感しました。生徒達を見ましても、30数キロ地点の検印所で、まだ前進出来そうな男子が何人も脱落していました。私達の頃は、もっと先に行く意欲を生徒が持っていたと思うのですが、困難に立ち向かいながらも前に進んでいくという意識は薄らぎ、周囲にも限界に挑戦させようという雰囲気が、あまり見受けられなかったのは残念なことです。

昭和12年に甲府中学校が発行した「本校に於ける強行遠足の意義とその実際」では、強行遠足は「剛毅不屈の精神を養うことがある」・「人格陶冶という教育究極目的達成のための手段であり、方法であり、道程である」と意義付けられています。「蚤のサーカス」という言葉がありますが、最初の段階で50キロと目標が低く設定されると、自ずと妥協と怠慢が生まれてくるものです。母校一高には、今後も若い生徒達に「自分の可能性に挑戦し、伸ばしていくことの大切さ」を学ぶ機会を提供し続けるために、「安全最優先」を徹底した上で、いまこそ原点に立ち返ってコースの延長という新たなる出発をして頂きたいのです。

野辺山に終着点が変更されて5年経ち、運営の中心となる母校教職員も小諸までの夜間歩行を経験している方が年々減ってきました。また、コース沿いの住民の方々から頂くご支援が不可欠なのですが、空白期間が長くなればなるほど協力が得られにくくなることは必定であり、来年度に小海まで(約70キロ)延長できなければ小諸コースの復活は大変厳しくなることが予想されています。生徒、父兄を始め、教職員においても伝統の風化が進んでいると見受けられる今、在校生と将来入学してくる生徒達のためにも、強行遠足の素晴らしさを知る私達卒業生がアクションを起こす必要があるのではないでしょうか。今年より、高校入試は全県一学区となり、一層の個性ある学校づくりが求められています。私たちの母校は、「質実剛健」という独自の校風を旗印に、伸び伸びとした教育環境の中で生徒を育めるよう、さらに努力していく必要があります。

このように、強行遠足の正常化は時宜を得た決断であり、貴重な教育機会の充実を実現することでしょう。私たちは、強行遠足の復活を目指して、次の活動を実施して参ります。ご協力を何卒お願い申し上げます。

コース延長を求める署名活動 別紙の趣旨にご賛同頂き、ご署名を頂くと共に、甲府中学・甲府一高卒業生の方々へ署名の依頼をお願い申し上げます。

安全な運営を支援する活動 前日・当日・翌日の準備、運営、片付けなど人的な支援を行います。同窓会員として、強行遠足の支援の活動にご協力いただける方は、下記の事務局までご連絡賜れば幸いです。

歴史や思い出を語り継ぐ活動 強行遠足に関わる写真・資料を収集し、歴史等を紹介すると共に、同窓生を取り材し、思い出のお話を後世に伝えています。下記の事務局まで情報をお寄せください。

強行遠足を支援する会

《事務局》

望月 幸一 (平成6年卒 生徒自治会長)

〒120-0002 東京都足立区中川4-27-2 望月幸一 方

古屋 哲郎 (平成6年卒)

TEL・FAX 03-5616-7766

深澤 太郎 (平成8年卒 応援団長)

ブログ http://ameblo.jp/kyoukoensoku/

Eメール kyoukoensoku@gmail.com